

## 浅沓と出頭沓

(財)遺芳文化財団  
日本はきもの博物館学芸課長 市田京子

日本在来の沓—和沓—には、皮革を用いたものだけでなく、木や布を用いたものも多くみられる。これらの沓は大きく儀式用と生業用とに分けられ、今回紹介する儀式用の沓は、古代からの伝承を受け継ぎながら、現在ではおもに神社仏閣で用いられている。



写真1. 浅沓

写真1の浅沓は明治時代のもと考えられる、スギを削り貫いて作られた木沓である。外底と爪掛け部の裏を除いて、木地に和紙を貼った上に黒漆が塗られ、中底には錦織りの布が貼られている。長さ28.1×幅11.1×高さ10.1センチ。

使用により押し潰されて写真では見えないが、爪掛け部の裏には綿を白布で包んだクッション状のものが貼り付けてある。これは足の当たりを和らげるためのもので、沓枕とか腰布団と呼ばれる。同様の形の木沓に錦織りの布を貼ったものは挿鞋（そうかい）と呼ばれ、やはり儀式用として伝えられている。

ただ、昭和初期頃までの浅沓は、スギのほか、キリやヒノキなどが用いられた木製の沓であるが、現在、伊勢市で作られている浅沓は一閑張りという和紙製である。木型に10数枚の和紙を張り重ねて成形し、黒漆を塗り重ねて作られ、中底と外底だけにスギとクスの板が貼られてい

る。しかし、その和紙製さえもプラスチック製に押されているというのも、浅沓の現状のようではある。



写真2. 出頭沓

写真2は、臨済宗で導師を勤める僧に用いられた、大正時代の出頭沓（しゅつとうぐつ）である。マツヤニとフノリを混ぜ合わせて塗り固めた和紙で成形した甲部を、革を重ね合わせた底に縫い付けて作られる。甲部の表に金蘭（平金糸をよこ糸に加えて織った錦織り）と組紐を貼った後、履き口の縁と底の周囲に白革が縫い付けられている。長さ28.0×幅10.5×高さ8.2センチ。

兵庫県香住町で収集した浅沓には「ピコウクツ（鼻高沓）」と呼ばれたという記録がある。鼻高沓（履）は、古代、中国大陸から倣って儀式用とされたもので、革に漆を塗った沓である。爪先が高く山形になっていることから「はなたかくつ」と呼ばれた。浅沓や出頭沓はその系譜に繋がる沓であり、それが呼称に残ったものであろう。

浅沓や出頭沓のような沓は、左右同形で大型であるため、襪（しとうず。指股の分かれな足袋）と合わせて、沓枕を当てて履かれた。また、歩行には、踵を持ち上げずに、沓を引きずるようなすり足で進むことが必要となった。